

カリキュラム改革後の HSK 取得者数および各級取得までの年数に基づく教育活動分析

(主専攻「中国語・中国文化プログラム」 辻 千春)

2017 年度より、現行カリキュラムの礎となる中国語・中国文化プログラムのカリキュラム改革を始動させた。【表 1】【表 2】に基づき、カリキュラム改革の成果について分析・検討したことについて報告する。

2018 年度より、HSK2 級受験費用を補助し、1 年次秋期において HSK2 級対策講義を必修化した。この意図は、HSK 受験者数が少ないこと、また 2017 年度以降、本学における学びの指標として HSK4 級取得を掲げたことによる。つまり、こうした措置により早期の段階で HSK2 級を取得させることで、それを起爆剤として上位級の受験を促そうと企図したものであった。しかしながら、【表 1】の通り、2018 年度から 2020 年度における HSK2 級の取得者数は入学者数の増加もあって増加したものの、【表 2】の通り、コロナ禍の影響で 2020 年の受験がままならなかったことを考慮しても、当該 3 年度の HSK3 級以上の取得に要する時間の短縮に反映したとはいえ、こうした措置が効果的に機能していなかったと言わざるを得ない。

一方、2019 年度より、主専攻登録制度を導入し学生の学修工程の見通しを明快にし、全学的なレベル向上に努め、2021 年度から 1 年次において発音会話に特化したネイティブの授業を配当するなど、カリキュラム改革もさらに進展を見た。これを契機に、前掲の状況にも鑑み、2021 年度より HSK2 級対策講義を必修科目から専門科目群の選択科目（他専攻も履修可能）に変更した。

この結果、【表 1】の通り、2021 年度から HSK2 級対策講義が必修ではなくなったため、HSK2 級の取得者は減少したものの、HSK3 級以上の取得者が増加し、【表 2】の 2021 年度以降に見られるように、上位級取得に要する時間が短くなっており、評価される。この背景には、前述のカリキュラム改革をはじめ、在学中の資格取得に対する単位認定制度の導入や、オリエンテーション（教職、キャリア指導なども含む）における中国語運用能力の視覚化の重要性についての指導などが有効であったと言えるのではないかと。本学では、主専攻に関わらず、英語、教職いずれの専攻においても、中国語運用能力はアピールできる重要な武器としているため、専攻に関わらず HSK 級取得者が一定の割合を占めており、本学の教育方針の真骨頂であると考えている。反面、2022 年度より一般学生の入学者数が減少したことにより、主専攻者が昨年度から連続して十数名程度となったことは、HSK 取得者数に少なからず影響を与えている。また、高校時代の 2、3 年間にわたりコロナ禍に遭った学生が入学者となり、2021 年度入学者と比較し、学力的かつ学修意欲的なポテンシャルが低下していることも看過されない。こうした学生に対し、より能動的に HSK 級取得を勧奨していく必要がある。既に着手している具体的な動きとしては、1 年次の台湾語学研修の再開や、語学ラウンジへの誘導、また中国人学生との互惠学修を自律的に展開する選抜クラスに 1 年生を選抜するなど、学修モチベーションの向上を図っている。

【表1】 入学年度(カリキュラム年度)別 HSK取得人数

(人)

入学 (カリキュラム)	取得級					計
	2級	3級	4級	5級	6級	
2017	3	3	1	1		8
2018	22	5	3	2	1	33
2019	26	22	6		3	57
2020	36	29	4	1		70
2021	5	18	3	1	1	28
2022	1	3				4
計	93	80	17	5	5	200

【表2】 入学年度(カリキュラム年度)別 HSK各級取得までの年数

(年)

入学 (カリキュラム)	取得級					受験回数 (平均)
	2級	3級	4級	5級	6級	
2017	2.0	3.3	3.0	3.0		2.0
2018	2.0	2.6	2.3	1.5	4.0	1.3
2019	2.8	2.9	2.7		1.0	1.1
2020	2.1	2.3	3.0	2.0		1.5
2021	1.8	2.0	2.3	2.0	2.0	1.5
2022	2.0	1.3				1.3
全体	2.2	2.4	2.6	2.0	1.8	1.3

(注) 表2の見方

各級の取得までの年数を表しています。例) 2.0 ⇒ 入学後2年以内に取得